

Title	ギリシア=ポリスの國家理念 : その歴史的発展に関する研究
Author(s)	合阪, 學
Citation	大阪大学, 1978, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/32246
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【3】

氏名・(本籍)	合 阪 學
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	第 4 4 3 6 号
学位授与の日付	昭和 53 年 12 月 19 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	ギリシア = ポリスの國家理念 ——その歴史的発展に関する研究——
論文審査委員	(主査) 教 授 岡部 健彦 (副査) 教 授 山田 信夫 教 授 当津 武彦

論 文 内 容 の 要 旨

〔目的〕 本論文は、古代ギリシア人が彼等の全生活の根源であると考えていたポリス国家を、その誕生（紀元前 800 年ころ）から終焉（紀元 3 世紀）にいたるまで、理念的にどのように把握し、またポリス国家の変遷にどのように理念的に対応したかを追究して、ポリス国家理念の連続性と一貫性を解明しようとしている。

〔構成〕 大綱は次のとおりである。

- 序説 「デーモス」と「コイノン」——ポリス理念史論の意図と編成——
- 前篇 ポリス理念の形成と展開——「デーモス」から「パトリオス・ポリーテイア」まで——
- 第一章 ポリス生成期の「デーモス」と「アゴラ」
- 第二章 テュラニスとイソノミアの間——植民運動の‘back influence’を中心に——
- 第三章 クレイステネース改革と「デーモス」
- 第四章 古典期アテーナイ国家の一断面——ストラテギア・モナルキア・アルケー——
- 第五章 アテーナイの「寡頭派革命」——ポリーテイア論の構成との連関——
- 第六章 スパルタ混合政論の展開——エポロス職の位置づけをめぐる——
- 中間考察 ポリス理念史の岐路としてのヘラス連盟
- 第一節 シュネドリオン考——「エイレーネー」の制度化とその限界——
- 第二節 ストラテゴス・アウトクラトル
- 後篇 ポリス理念の拡大と変容——「コイノンとしてのローマ帝国」に到る——
- 第一章 コイノン——拡大されたポリス理念——

第二章 ヘレニズム王権とポリス理念

第一節 コイノンの立場より見たるアンティゴノス王朝の性格

第二節 シュノイクスマスとシュムポリーティア——セレウコス王国の植民運動について——

第三章 ローマ世界に於けるポリス理念

第一節 ギリシア＝ローマ両国家理念の交錯——グラックス改革の指導原理に見る——

第二節 ポリス市民の描くローマ帝国像——その前提と達成——

〔内容〕

世界史上、きわめてユニークな国家といわれるものに、古代ギリシア人が地中海世界の各地に、無数に建設した「ポリス」——それは自らその特性を「自由と自治」と称し、「都市国家」とも「共同体国家」とも訳される——がある。ギリシア＝ポリスは紀元前800年ころ小アジアで生まれ、やがでギリシア本土をはじめとする地中海地域にひろがり、ヘレニズム時代には前方アジアの奥深くにまで建設の波がおよび、紀元3世紀に後期ローマ帝国の機構の中に吸収されるまで、およそ1000年余にわたる命脈を保った。その間、ギリシア人はポリスでの国家生活の経験にもとづき、独特の国家理念——「ポリス理念」Polisidee——を生み出し、また発展させた。

本論文はこの期間——ポリスの誕生から消滅まで——を通じて、ポリス市民の「全一性」の理念（ポリスは市民の共同体であり、全市民が一体となって国家の運営に当るという考え）がギリシア人によって一貫して維持され、この理念が種々のかたち展開・変容して行ったことを、「デーモス」（この語は村落共同体から国家に至るまでの種々の意味内容を含む）と「コイノン」（この語は村落共同体から連邦に至るまでの幅をもつ種々の意味をもつ）の両概念を中心に述べようとするものである。すなわち、前篇では、「ポリーティア」（市民団＝国家、国制、市民権）が「デーモス」（地縁共同体、民衆、民会）を核として形成され、続いてポリス市民によって混合政（これもポリーティアとよばれた）が「父祖の国制」として理論化される過程が辿られる。後篇では、「コイノン」（連邦——それは拡大されたポリス理念である——）とヘレニズム・ローマ国家との関連が考察され、最後にギリシア人がローマ帝国をもコイノンの概念でとらえようとするに至る経緯が論じられる。なお、両篇の間には〔中間考察〕がなされていて、前篇から後篇への議論の発展方向が指示されている。

前篇：ポリス理念の形成と展開——「デーモス」から「パトリオス・ポリーティア」まで——

前半では、まずポリス生成期のデーモス（村落・村民、国土・国民）の動向をさぐり、アゴラ（広場・集会）がポリスの生成の背景をなしていたことを指摘することから始まる（第一章）。続いて、市民の共和政として生れたポリスの市民政治が僭主政との拮抗を通じて成長し、とくに植民運動の母市への逆影響としてイソノミア（民主政）が準備されたこと（第二章）、最後に民主政がデーモス（地区共同体、民衆、民会）の勝利として達成されたことが述べられる（第三章）。

前篇の後半では、ペリクレス時代の指導された民主政（第四章）を経て、極端民主政が「寡頭派革命」を招き、これをきっかけとしてなされたポリスへの反省を通してポリス理論が構成されたこと、すなわち混合政——民主政と寡頭政の混合——が理想の国制（パトリオス・ポリーティア）として理論化されたことが述べられ（第五章）、最後にスパルタの国制における混合政の問題がとりあげられ

る（第六章）。

〔中間考察〕はポリスを越えた秩序の発展を、組織と指導ないし支配の両面から考察する。まず同盟ないし連盟におけるシュネドリオン（会議）の役割が検討され、続いて、絶対権をもった軍事指揮権の系譜がたどられる。そして、紀元前338年のヘラス連盟の中にそれら二つの発展の集大成がみられ、この連盟がポリス理念史において分岐点に位置していた次第がのべられる。

後篇：ポリス理念の拡大と変容——「コイノンとしてのローマ帝国」に到る——

アルカイック期以来ギリシアの連邦では、ポリスと同様に、総会に体现された「全一性」の理念が基底をなしていた。すなわちコイノンがポリス理念の終焉ではなく、拡大であったことがのべられる（第一章）。続いて、ヘレニズム王国（アンティゴノス朝マケドニア王国、セレウコス朝シリア王国）の政治にも同時代のギリシアで有力であった国家形態（コイノン）が影響を与えていたこと（第二章、第一節、第二節）、最後に、直接民主政と連邦主義——共にギリシア起源である——のローマでの運命（第三章、第一節）および帝政期のギリシア人がローマ帝国を無限に拡大されたポリス——コイノン——であるとするに至った経過がのべられる（第三章、第二節）。

このように、本論文は、ギリシア＝ポリスの誕生にはじまり、ポリス市民的国家理念の終焉に至るまでの期間を貫く「ポリス理念の発展」の連続性の確認をめざし、古代ギリシア人が国家の建設や理論に関してローマ人に先んじ、あるいは彼らに並行して創造的な努力を重ねていたことに人々の注意を向けようとするものである。

論文の審査結果の要旨

古代ギリシアのポリスは、通説によれば、紀元前4世紀末からのヘレニズム時代に入ると、アレクサンドロスの後継者達の広域を支配する王朝国家に服属して独立性を失い、それとともにポリス存立の歴史的意義もなくなって、やがてローマ人の征服（紀元前2世紀以降）のもとに消滅するものと考えられている。したがってポリスの国家理念についても、紀元前4世紀までの古典的ポリス観が典型とみなされ、とくにプラトーンやアリストテレスのポリス国家哲学を中心とする研究が盛んに行なわれてきた。ヘレニズム以降の国家生活としては、世界市民主義（コスモポリタニズム）が時代の傾向であると強調され、それは盛期ギリシアのポリス的国家理念とは全く反対のもの、ないしはそれを逸脱したものであると解されている。

本論文は、ポリスの形成期からその終焉にいたる約1000年余の各時期にわたってポリス的国家理念の発展をたどりながら、通説において軽視されている紀元前4世紀以降のポリス的国家理念、とくに「コイノン」（連邦）の概念を重視し、それが古典期におけるポリスの「デーモス」と同様に、ポリスの市民的国家理念の本質を保持していたことを論証している。しかも古代ギリシア人は、この「コイノン」をローマ帝政期まで維持するのであり、彼等のポリス的国家理念は絶えることなく連続していたことが力説されている。

まず、村落共同体としてのデーモスが王政、貴族政、僭主政を排し、地区共同体、民衆、民会のデーモスとして、ポリスの自治と民主政の中核となり、クレステネースの改革を通じて民会の優位が完成する過程が述べられる。この叙述は、ポリスの本質が市民の民主政にあったことを確認するものである。

しかし下層市民の抬頭で民主政が動揺し、ポリスの解体が始まると、軍事指揮官（ストラテゴス）の優位や「寡頭派革命」が現われる。この間に理想的なポリスのあり方が「父祖の国制」として摸策されるようになり、王政、寡頭政、民主政の混合政体が正統なポリス国家論のモデルとなった。アリストテレスはその完成者として位置づけられる。

紀元前4世紀以降には、ポリスの弱体化の対応策として、「平和」（エイレーネー）の理念のもとにポリスの連合が形成されるが、この結合を永続的制度とする努力がはられる。それが「コイノン」（連邦）であった。（コイノンは本来「共同のもの」という意味であるが、同時にそれには「デーモス」と同じように村落、村落の連合、民衆、民会等の意味も含まれていた。）連邦としての「コイノン」は総会をもつが、それは各ポリスの個別的利害を超えて連合体の全体のことについて議する立場にあった。したがって「コイノン」は、それを構成する個々のポリスの単なる集積ではなくて、総会において「自治」と「全一性」を保持する単一体であると考えられた。本論文はこのような「コイノン」を拡大されたポリス理念と規定する。すなわち「コイノン」の総会はポリスの「デーモス」（民会、民主政）に相当するものであったと把握されているからである。

ヘレニズムの王朝国家も自国内にギリシア人の「コイノン」を包含し、コイノンを通じて彼等を支配した。その限りでは、ギリシア人はポリス的な国家理念を維持し、そのもとに生きていた。ヘレニズム諸国に代ってギリシア人を支配することになったローマ人も、「コイノン」に対する関係を継承する。

ギリシア人はローマ国家をポリスの理念の枠組で眺め、ポリュビオスのようにローマを理想的な混合政体としてとらえた。しかしグラックスの改革によるギリシア＝ポリスの国家理念——民主政と連邦国家——の導入は成功せず、ローマは帝政に帰着する。それにもかかわらずギリシア人は、紀元2世紀においても、彼等の連邦をモデルとして、なおもローマ帝国を「コイノン」であると見ようとしたのである。

以上のように本論文は1000年にわたるギリシア＝ポリスの国家理念の変遷を「デーモス」から「コイノン」——拡大されたポリス理念——への発展としてとらえ、しかもこの発展が根本的には市民的國家理念によって貫かれており、連続性を維持していたことを論証し、通説におけるギリシア＝ポリス理念史像の改訂をうながしている。

論証に際しての史料批判、研究文献・研究史の再検討もきわめて着実であり、独創的な構想が緻密で堅実な研究手続きの基礎の上に構築されていることも、本論文の価値を高めている。

しかしながら、敢えて望蜀の感を述べるならば、次のような諸点が指摘されよう。ポリス理念に関しては、古典期ギリシアの國家哲学および法理念について優れた研究がすでにおびただしく発表されている。これらの研究についても本研究が触れ、自説の位置づけを明確に示すことが必要であろう。

また、ペロポネネース戦争がポリス理念の転換に与えた史的意義についても、強調されることが望ましかった。

さらに、「コイノン」をローマの「レース・プーブリカ」と対比するに当り、ローマ人の国家理念に対する探究を深化するならば、「コイノン」のギリシア的独自性がいっそう明確に示されたのではなかろうか。

このような指摘にも拘らず、本論文が優れた独創的研究であることは疑いのないところであり、文学博士の学位請求論文として十分価値あるものと認定する。